

「男、突っ走る！」

第66回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内雅也	（22）	『オフィスツリーイン』代表
國村英作	（51）	まちづくり会社社長
伊藤藤沙	（32）	若手起業家
大島幸次	（51）	広告制作会社社長
橋崎悟	（47）	WEB会社社長
国枝良江	（57）	市民映画プロデューサー
鈴木川	（68）	広告制作会社営業担当
黒田武彦	（45）	市議会議員
辻宏	（34）	保険営業マン
赤澤辰夫	（43）	システムエンジニア

1 『スタイル・タウン』・事務所

編集会議をしている雅也、國村、伊藤、

大島、橋崎、国枝、鈴川。

大島「じゃあ、巻頭特集はシニアの声を取材するってことで良いか」

國村「毎週金曜日、すぐその南公民館でシニアサロンやってるので、取材するならばようど良いかもしれません。サロンの代表には、僕から連絡入れておきます」

雅也「(スケジュール帳を見て)金曜日だったら、僕も大丈夫です」

伊藤「木内君一人じゃ大変でしょ」

国枝「じゃあ、私も一緒に参加します」

大島「当日のカメラマンは俺がやる」

國村「お願いします」

橋崎「すいません、金曜日は仕事が……」

國村「分かりました。ただ同時にシニアの取材ってなると、メモする木内君が大変なんじゃないかな」

雅也「確かに、分身がいれば良いんですけど

ね」

鈴川「取材シートっていうの作ったら、何も木内君一人の負担にはならないんじゃないですか？」

雅也「取材シート？」

鈴川「名前と年齢、取材内容を簡単な一枚の表にしてまとめるんです。そうすれば、木内君以外にも現場の人たちが、そのシートを使って取材したりメモをして、シートは後から木内君が回収して、シートของメモをもとに原稿を仕上げる」

雅也「確かに、負担が減るなら、それに越したことはないですけど」

伊藤「じゃあ、そのシートは私が作って、皆さんに共有します」

雅也「お願いします」

國村「巻頭特集は決まりそうですね。後はスポンサーですが、現在どうでしょうか？」

鈴川「今、営業資料をもとに近隣のお店に営業かけてます。いくつか前向きな検討をし

ているところがあるので、後でもう一度確認をしてみます。スポンサー申込書と営業資料を郵送でお送りしたところで、まだ連絡できてないところがあるので、そこもまた連絡してみます」

國村「よろしくお願いします」

## 2 商店街

鈴川が歩いている――後ろから雅也が歩いてくる。

雅也「良江さんッ（と呼び止める）」

鈴川「あら、木内君」

雅也「さつきは、ありがとうございました」

鈴川「え？」

雅也「取材シートのことです」

鈴川「ああ。取材内容がある程度テンプレになつてるときはね、シートを作ったほうが楽なのよ。これは取材に限ったことじゃない。くて、スポンサーでも同じことが言えるの。

お店の名前や住所、電話番号、定休日、お

店のアピールポイント、その他注意事項：  
：入れる内容がある程度決まってるでしょ。  
そういう時は一覧表にしといたほうが、こ  
っちも聞きやすいのよ。掲載写真も、先方  
からもらうときもあれば、新しくカメラマ  
ンに頼んで商品の物撮りすることがあるか  
らね。その確認もシートに入れておくと、  
何かと便利なのよ」

雅也「知りませんでした：：勉強になります」

鈴川「お店紹介の原稿、木内君書いたことあ  
る？」

雅也「いえ。前回の創刊準備号のときは、大  
島さんが書いてくださったので」

鈴川「大島さんも、元は私と一緒にタウン誌  
の編集やってたから基本は全部分かってる  
のよね」

雅也「大島さん、確かタウン誌の編集長ずつ  
とやってたんですよね」

鈴川「そう。私は、その時営業スタッフで、  
今みたいにスポンサー獲得のためにいろいろ

ろアプローチしてたの。あの時は、営業スタッフが各自で自分の原稿を書いていたの。スポンサーになったお店の紹介とかもね」

雅也「だからシートの存在がヒントになったんですね」

鈴川「そういうこと。まあ、現場経験を踏まえたうえで、うるさいおばさんが勝手に言ってることだけどね」

雅也「とんでもない。僕なんて、まだ専門学校卒業して半年ちょいしか経ってませんか。経験値も全然で。だから、こういうところで良江さんや大島さんみたいに、現場一本でやってきた方と仕事できて、ありがたいと思ってるんですよ」

鈴川「上手ね、持ち上げるのが」

雅也「いやいや、本当ですって」

笑いあう雅也と鈴川。

### 3 南公民館・和室（数日後）

雅也、國村、国枝がそれぞれ取材をし

ており、画用紙を持ったシニアたちの  
写真を撮影している大島。

N「それから数日後。僕たちは、南公民館の  
シニアサロンに足を運び、シニアの方たち  
に取材をしました。僕、國村さん、国枝さ  
んが取材をし、大島さんが素材写真の撮影  
という分担で、一時間近くの中で二十人近  
いシニアの方の話を聞くことになったので  
した」

#### 4 喫茶店

雅也、國村、国枝がコーヒーを飲んで  
いる。

國村「お疲れさまでした」

雅也「こんなエネルギー使う取材、久しぶり  
でした」

國村「国枝さんなんか、すごく慣れてるよう  
な感じでしたけど」

雅也「本当びっくりしました。相手の答えを  
聞き出すのが上手いってどうか。やっぱり、



プロデューサーをやってる方は、聞き上手で話し上手なんですかね」

国枝「私ね、主人の仕事の都合で一時期アメリカに暮らしてたことがあるんですけど、現地でイベント企画とかもやってて、そういうときファシリテーターもやってたんです」

雅也「だから上手いんですね。僕なんて、話すことは好きなんですけど、こういう仕事のことになるとそれほど得意じゃなくて。まあ、だから原稿を書くことに専念してるんですけど」

国村「木内君だって、シニアの方と仲良さそうに話してたじゃん」

国枝「年齢的に、ちょうど今日取材した方の孫世代になるんじゃない？」

雅也「確かに今日の取材で年齢をお聞きすると、僕の祖父母と同じぐらいの年頃の方たちばかりでした。うちは、父方も母方も祖父母は両方とも元気ですけど、よくよく考

えたら今日みたいなシニアサロンみたいなところに足を運ぶような感じじゃないんですよね。だから、今日いろんな方の取材して、いろいろな人生があるんだなと思って。やっぱり取材は楽しくやらないと」

国枝「大変だった取材もあるの？」

雅也「ありましたよ。学生時代に、フリーペーパーの取材記事と連載をやってたんですけど、発行一周年のときに誰にインタビューしようかってなったら、記念だからって市長の取材をしたんですよ」

国村「市長って、あの名古屋弁ばかりの」

雅也「はい。しかも、『名古屋の魅力は何ですか？』ってこっちが聞いているのに、急に自分の政策の話をベラベラしゃべり始めるんですよ」

国枝「特定の会派とかの政治の話を、フリーペーパーに書くわけにはいかないもんね」

雅也「そうなんですよ。フリーペーパーにせよ新聞にせよ、メディアっていうのは基本

的には中立な立場で書かないと、読む人によつては『あ、このメディアはこの党を支持してるのか』なんて言われちゃいますからね。だから取材中、市長の話を聞いてる間、心の中では『こんなこと書けるわけないだろ』って思いながら聞いてました。しかも、一周年なんで文字数もいつもより多いんですよ。使える情報の中から内容を膨らませるのに苦労しましたよ。まあ、最後は最終奥義使っちゃいましたけど」

国村「最終奥義って？」

雅也「紙媒体って、WEBと違って、文字数が限られてて、写真の枚数も決まってるでしょ。なので、写真のサイズを少し大きくしたり、小さい写真を一枚追加して、なるべく文字が削れるように工夫したんです」

国枝「なるほどね。確かに、それなら文字数調整できるわ」

雅也「まあ、あんまりよろしくないので普段は使ってないですけどね。まあ今回の場合

は、取材の素材も揃ってますし、デザインをするのは大島さんの会社のデザイナーさんなので、僕があれこれ口を出すことではないですけどね」

國村「巻頭特集の原稿、楽しみにしてるよ」  
雅也「はいッ」

#### 5 木内家・雅也の部屋

雅也が、取材シートを見ながらパソコンに向かって原稿を書いている。

N「それからしばらくは、巻頭特集の原稿執筆に没頭しながらも、帳簿への数字入力や領収書整理などの会計作業をすることになりました。その中で僕は、もっと他の仕事を取ってくるために、まずは地元で顔を売っていかうと思ひ、地元の公民館で開催された『まちづくり意見交換会』に参加をしました」

#### 6 公民館・会議室（夜）

『まちづくり意見交換会』が開催されており、参加者たちが模造紙に付箋を貼りながら意見交換をしている――その中に雅也の姿もある。

テーブルを回っている辻沢宏（34）が、雅也のもとにやってきて、

辻沢「今日は、ご参加ありがとうございます。主催の辻沢と言います。（と名刺を出して）本業は保険の営業です」

雅也「木内と言います。（と名刺を出す）」

辻沢「（雅也の名刺を見て）へえ、脚本にライター……なかなかうちの地元じゃ珍しい職種ですね」

雅也「だからこそ地元で起業しようと思ったんです。せつかくなら、自分のスキルを地元で生かしたいと思って」

辻沢「そうですか」

と、スーツにオレンジ色のネクタイをつけた黒田武彦（45）が入ってくる。

黒田「申し訳ない。遅くなりました」

辻沢「遅いですよ、黒田先輩」

黒田「公務が長引いてしまっただけ」

辻沢「こちらのテーブルで。 (と雅也のもと

へ案内する)」

黒田「初めまして、黒田です」

雅也「よろしくお願いします」

黒田「 (辻沢に) 初めて見る顔だね」

辻沢「今日、初参加の木内さん。地元でライター業をしてるんです。 (と雅也に) こちら、僕の高校時代の野球部の先輩の黒田さん」

雅也「 (名刺を渡して) 初めまして、木内と言います」

黒田「 (名刺を渡して) 黒田です、よろしく」

雅也「 (名刺を見て) 市議会議員……」

黒田「まあ、この間の六月の選挙で初当選した新人ですけどね」

雅也「そうでしたか」

と、物珍しそうに黒田の名刺を見る。

7 同・廊下

雅也、辻沢、黒田が歩いている。

雅也「今日は、ありがとうございます」

辻沢「こちらこそ」

黒田「木内君は、何か目標とか地元でやってみたいこととかはないの？」

雅也「そうですね……。ああ、まだいつになるか分からないんですけど、地元のフリーペーパーを作りたいと思ってるんです」

黒田「フリーペーパー？」

雅也「今、隣町でシニア向けフリーペーパーのライターをやってるんですけど、いずれは自分が育ったこの街のフリーペーパーができないかなと思って」

辻沢「良いですね。そういう熱い目標は、応援したくなります」

黒田「協力できることは何でもするよ」

雅也「ありがとうございます。市議会議員の方にご協力いただけるなんて、これほど心強いことはないですよ」

黒田「頑張ってるね。じゃあ、俺はこれで」

と、去っていく——軽く会釈をして見送る雅也。

## 8 木内家・雅也の部屋

N「それから数日後のこと……」

雅也が、領収書の整理をしている——  
スマホに着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし？」

男の声「もしもし、木内さんの電話でしょうか？」

雅也「はい、そうですが」

男の声「市議会議員の黒田です」

雅也「ああ、黒田さん」

## 9 市役所・廊下

黒田がスマホで電話をしている。

黒田「先日はありがとう。実はね、今日はちよつと木内君に相談があつてね」

雅也の声「はい？」



黒田「僕ね、ラジオ局の市民枠で、第三火曜日の夜の十一時から放送されてる番組を、辻沢と一緒にやってるんだけど、良かったらゲストとして来ない？」

10 木内家・雅也の部屋

雅也がスマホで電話をしている。

雅也「え、僕がですか？」

黒田の声「一時間枠なんだけど、前半の十分は地元で活躍する人たちをゲストに呼んでトークをするんだよ。来月の放送回のゲストをどうしようかって相談したら、ちょうど木内君ならどうかってことだね」

雅也「僕でよろしければ、ぜひ」

11 市役所・廊下

黒田がスマホで電話をしている。

黒田「ありがとうございます。収録日程とか、詳細はまた連絡します。じゃあ、よろしくね。はい、それじゃあ（と電話を切る）」

12 ラジオ局・オフィス（夜）

N 「月末になり、僕はラジオ局を訪れました」

辻沢と黒田に伴われて雅也が入ってく

る——赤澤辰夫（43）とディレクタ

ーが、既に待っている。

黒田 「今日のゲストの、木内君連れてきたよ」

赤澤 「待ってたよ」

黒田 「木内君、こちら僕たちと一緒にラジオ

をやってる赤澤君」

雅也 「木内です、今日はよろしくお願いしま

す」

赤澤 「赤澤辰夫です。本業はシステムエンジ

ニアをしています」

ディレクター 「そろそろ準備をお願いします」

一同 「はい」

13 同・収録室

ディレクターがキュー出しをする——

音響席にいる赤澤がスイッチをオンに

する。

イヤホンをつけてマイクの前に座っている雅也、黒田、辻沢。

黒田「さあ、というわけで今日のゲストをご紹介しましょう。それでは、つーじー、紹介お願いします」

辻沢「はい。本日のゲストは、地元でライター業をしている『オフィスツリーイン』代表の木内雅也さんです」

雅也「よろしく申し上げます」  
拍手をする黒田と辻沢。

黒田「いや、今日のゲストは若いね。ちなみに木内さん、今おいくつですか？」

雅也「今年二十二歳になります。まだ二十一歳です」

黒田「聞いた？ 二十二だって。二十二の時間なんて、俺何やってたかな、こんなしつかりしてなかったと思う」

辻沢「このラジオ始まってもう一年半経ちますけど、多分ゲストの中では史上最年少だ

と思います」

黒田「だよ。毎回大体、暑苦しいオジサンばかりだもんね」

辻沢「（苦笑して）その発言は辞めたほうが良いと思います」

赤澤「僕がこんなこと言うのなんだけど、そろそろ早速本題に入らない？」

黒田「そうだね、ホーリー。というわけで、木内さんは普段どんなことをしてますか？」

雅也「はい。僕はですね、先ほど簡単な紹介があつたと思いますけど、ライターをしています」

黒田「具体的にどんなことをしてますか？」

雅也「脚本を書いたり、取材記事とかフリーペーパーの原稿を書いたり、まだ個人事務所を始めて半年なんですけど、少しずつ活動の幅を広げている途中です」

辻沢「今個人事務所って話がありましたけど、それまでは何をしてたんですか？」

雅也「半年前までは、専門学生でした」

黒田「じゃあ、卒業してすぐに個人事務所を作ったわけだ」

雅也「そういうことですね」

黒田「行動力がすごいね」

辻沢「地元大好きな我々も、こういう行動力はね、見習わないといけないですね」

黒田「そうだね」

N「ラジオの収録はとても楽しく、新鮮な時間でもありました。そして、収録が終わった後のこと……」

#### 14 ファミレス（夜）

雅也、黒田、辻沢、赤澤が話している。

雅也「え、僕がレギュラーですか？」

黒田「せっかくだし、脚本やってるなら、そのままレギュラーやりながら、番組の構成台本を作ってほしいと思ってね」

雅也「構成台本……」

赤澤「一年半やってるから、大体の流れはあるんだけど、ちゃんとした構成台本が存在

しないから、ついトークの時間が押しちやったり、本来伝えなきゃいけないことを伝え忘れることがあるんだよ。だから、ちゃんと要点をまとめた台本があれば良いかな  
と思っ  
てね」

辻沢「どうだろう。変に、気負いしなくても大丈夫だよ。気軽に楽しんでもらえたら」

雅也「僕なんかで良いんですか？」

黒田「もちろん。木内君みたいな、次世代を担う子が一緒にラジオ番組に関わってくれたら、こんなにありがたいことないもん」

雅也「ありがとうございます」

N「思いがけない展開で決まった、新しい仕事の依頼だったのでした」

つづく